

- * 「霊的大人になる」ために、逆説的であるが、生まれたときのことを考えるのがよい。誰でもキリストに出会って信じ、バプテスマを受けたとき、霊的に新しく生まれたのである。
- * 異邦人の生き方の特徴。エペソの信徒はほとんどがいわゆる「異邦人」であった。パウロは、ユダヤ人ではないという意味よりも、真の神を知らないという内的な意味で使っている。その異邦人の特徴はエペソ4:17~19にあるが、一言でいえば「**神のいのちから遠く離れている**」(エペソ4:18)ということであった。具体的には、
 1. 「空しい心で歩んでいる」(4:17) 私たちの究極の心の空しさは、人生の目的がわからないときに現れる。聖書が示す人生の目的は、「人間」の中にはなく「神」の中にある。私たちは神の栄光のために生きている。
 2. 「知性において暗く、無知」(4:18) エペソなどの大きな町は文化が進み、豊かな生活をしていた。人間の知恵においては明るかったかもしれないが、「主を恐れることは知識の初めである」(箴言1:17)と言われるように、唯一真の神を抜きにしては真の「知性」はない。それは私たち自身も同じである。
 3. 「道徳的に無感覚」(4:19) 当時の町々は性道徳をはじめ、金銭などの乱れがひどく、罪を罪と思わなかった。それこそが罪であった。今日の日本でも変わらない。
- * しかし、彼らに反して、あなたがた(エペソの信徒)は、真理はイエス・キリストにあることを学んだはずだ、という。その教えは古い人から新しい人に劇的に変わったということ。
 1. 「古い人」とは。異邦人のように、「人をあざむく情欲によって滅びていく人間」。言い換えれば、生まれたままの罪の奴隷として生きている人。罪の解決がない人のことである。
 2. 「新しい人」とは。すべての人は、神にかたどり、神に似せて造られたが、その形が歪んでしまっている。その歪みを治してくださる手段がイエス・キリストである。この方によって罪赦された人のことである。新しい人は、「**真理に基づく義と聖**」(4:24)を与えられている。何が本当に正しいのかを知るのには「真理」であるイエス・キリストによるしかない。
- * イエス・キリストを信じてバプテスマを受けた人はすでに「新しい人を着た」のである。着続けているのである。初めてキリストを着せてもらった時のこと、その感動を思い出そう。キリストを着たのは自分で選んだのではなく、神様からの特別のプレゼントであったことに感謝しつつ、キリストを着こなしていきたい。